

喜びも悲しみも 幾年月

—— 映画文学人生論

原作：田中きよの手記（1956年）

監督：木下恵介（1957年）

出演：有沢四郎 佐田啓二

有沢きよ子 高峰秀子

有沢雪野 有沢正子

有沢光太郎 中村賀津雄

脚本：木下恵介

撮影：楠田浩之

音楽：木下忠司

野津 田村高廣

産婆が間に合わなければ俺がとりあげてやる

木下恵介監督の『喜びも悲しみも幾年月』は昭和三十二年に大阪の映画館で観て、感動した。まだ社会人になる前だったので、将来は灯台守になりたいとさえ思ったほどだ。

夫婦を中心とした素朴なヒューマニズムや若山彰が歌う主題曲にも情緒を動かされたが、なによりも灯台の映像に魅せられた。観音崎灯台、石狩灯台、伊豆大島灯台、水ノ子島灯台、女島灯台、弾埼灯台、御前埼灯台、安乗埼灯台、男木島灯台、日和山灯台、ラストはふたたび観音崎灯台。

今回。DVDで観ても、やはり海と灯台の映像には魅せられるが、今さらもう灯台守にはなれない。それに。灯台守の暮らしは決して甘いものではないことが観客にもわかるように映画がつくられている。

きよ子（高峰秀子）は四郎（佐田啓二）と見合結婚し、観音崎灯台で暮らしはじめた初日、いきなり狂女に出会う。同僚の妻が僻地の勤務のさびしさに耐えかねて精神異常をきたしていたのだ。

時は上海事変が勃発した昭和七年、さらに、日中戦争を経て日米開戦、敗戦につながる戦乱の時代である。日本の敗色が濃厚になり、本土が空襲されるようになる。灯台は空襲の標的になり、殉職者が続出した。夫婦喧嘩、別居、息子の死などのつらい経験もなめている。

喜びも悲しみも 幾年月

映画文学人生論



しかし、喜びも悲しみも幾年月、たまに喧嘩はしても夫婦仲はよく、最後は夫が灯台場長に栄進して、勤続二十五年の表彰を受け、娘が結婚してエジプトのカイロに向かう船を見送るといふハッピーエンド。

やはり映画の醍醐味は後味の良さか。とはいっても、きれいごとですませているという印象も今回は受けた。灯台と海の映像は素晴らしいが、人間の生活はきれいごとだけではすまない。

たとえば、北海道の石狩灯台に赴任したとき、赤ん坊が生まれそうになるが、産婆がやってこない。「産婆が間に合わなければ俺がとりあげてやる」と夫はいい、無事出産すると、外へ飛び出して「バンザイ」と叫ぶ。この感動的なシーンは観客の共感をよぶが、実際に夫が赤ん坊をとりあげるシーンは撮影されていない。

夏目漱石の小説『道草』では夫の健三が赤ん坊をとりあげる場面と夫の心理が描写されている。

「彼の右手は忽ち一種異様な触覚をもって、今まで経験した事のない或物に触れた。その或物は寒天のようにぶりぶりしていた」「それ（脱脂綿）を無暗（むやみ）に千切って、柔らかい塊の上に載せた」「ああ云うものが続々生れてきて、必竟どうするんだらう」。

映画と文学の感動の違いといふべきか。

海猫よ産婆はまだか灯台守